

学 位 論 文 要 旨

氏 名 上岡 清乃



論 文 題 目

「英語の読み書きの学習に困難さを示す児童生徒の早期発見を
目的としたスクリーニング検査の開発」

指 導 教 授 承 認 印

石坂 郁代



英語の読み書きの学習に困難さを示す児童生徒の早期発見を目的とした スクリーニング検査の開発

氏 名 上岡 清乃

【問題と背景】

第二言語の習得は、母語に比して難しいとされ、その学習につまずいている児童生徒の支援は重要である。我が国における第二言語は英語であるが、英語は書記素と音素の対応関係の複雑さから日本語よりも習得が難しい言語であるとされる (Wydell & Butterworth, 1999)。日本では、グローバル化に対応した英語教育改革の全面実施 (文部科学省、2020) に伴い、英語の読み書きに困難さを示す児童生徒の早期発見・早期支援は喫緊の課題となった。本研究ではこの問題に対応するために、英語の読み書きの学習に困難さを示す児童生徒を早期発見することを目的としたスクリーニング検査の開発と、その有用性について検討を行った。

【方法】

1. 研究 1：スクリーニング検査の作成

1) 対象

A・B 県内の公立小中学校のうち、当該教育委員会および学校長より調査協力の承諾を得られた 11 校で調査を実施した。対象は、通常の学級に在籍する児童生徒 1,218 名 (小学 5 年生 267 名・6 年生 269 名、中学生 1 年生 327 名・2 年生 285 名・3 年生 70 名) であった。

2) 課題

読み書きに関わる認知神経心理学的情報処理プロセスに基づき、問 1：文字識別課題、問 2：文字認識課題、問 3：無意味語異同弁別課題、問 4：語彙性判断課題、問 5：意味理解課題、問 6：有意味文視写課題、問 7：無意味文視写課題の 7 課題を設定した。問 1～問 5 は読みに関わる能力を、問 6 および問 7 は書きに関わる能力を評価する課題である。

3) 手続き

検査実施者は各学校の学級担任または教科担当教員であり、教室内で集団形式で実施した。教員は事前に配布された実施手引きに従い、順番に課題を進める形式で行った。所要時間は 20 分程度であった。

4) 分析

問 1 から問 5 は正答数 (各 10 問) の合計を読み得点とした (50 点満点)。問 6 および問 7 は、1 分間あたりの正答書字数の平均を書き得点とした。各学年における得点分布を確認するとともに、学年間の得点平均の差を確認した。カットオフ値の設定に際しては、Kamioka et al. (2022) の結果に基づき、得点平均の 1.5SD を下回った者をリスク群として抽出することとした。

2. 研究 2：教員への聞き取り調査の実施

1) 対象

研究 1 の対象校のうち、学校長より承諾の得られた小学校 2 校と中学校 1 校において、教員へ

の聞き取り調査を行った（小学 5 年生 58 名、6 年生 53 名、中学 1 年生 85 名、2 年生 71 名）。

2) 手続き

担任あるいは英語教科担当教員に、英語教科の成績や読み書きの様子などをもとに児童生徒について「英語の読みや書きについて苦手さがある／苦手がない」を訊ね、スクリーニング検査の結果と比較した。

3) 分析

本スクリーニング検査の精度を明らかにするために、スクリーニング検査の結果を検定変数、教員への聞き取り調査の結果を状態変数として、受信者動作特性（Receiver Operating Characteristic; ROC）分析を行った。

3. 研究倫理

本研究は、北里大学医療衛生学部研究倫理審査委員会の承認（受付番号：2020-004）を得て行われた。

【結果】

学年間で基礎分布に異なりが認められた（ $p < 0.01$ ）ため、カットオフ値は学年別に算出された。各学年の読み得点においては、小学 5 年生 7.1%（19 名）、6 年生 6.3%（17 名）、中学 1 年生 9.8%（32 名）、2 年生 9.5%（27 名）、3 年生 7.1%（5 名）の児童生徒がリスク群として抽出された。同様に、書き得点においては、小学 5 年生 4.5%（12 名）、6 年生 5.2%（14 名）、中学 1 年生 5.8%（19 名）、2 年生 5.3%（15 名）、3 年生 4.3%（3 名）が抽出された。また、ROC 分析を行った結果、曲線下面積（AUC）は 0.865、陽性的中率は 95.9%であった。

【考察】

読み得点および書き得点ともに学年間で有意差が認められたことより、読みの基礎的能力ならびに書きの基礎的能力は、年齢が上げるにつれて発達／習熟していくものであると考えられる。

DSM-5によると、限局性学習症は、ある学習領域内における到達度が年齢平均値よりも 1.5SD を下回ることが診断の確実性を高めるものとして必要とされており、これは人口のおよそ 7%にあたる。本スクリーニング検査ではカットオフ値設定の基準として $-1.5SD$ を用いたが、その結果、読み得点において 6.3%～9.8%のリスク群を抽出できた。また、AUC は $0.8 \leq ROC < 0.9$ の場合優れた識別力を有するとされるが、0.865 と高い値を示したことより、本スクリーニング検査によって、英語の読みや書きに苦手さのある児童生徒を的確に発見することができると考えられる。

【結語】

本検査の構成課題は認知神経心理学的モデルに依拠しており、英語の読み書きの困難さの背景となる認知機能を明らかにすることができ、一人ひとりの苦手さに配慮した指導へと繋げていくことが可能となる。今後はさらに、抽出された児童生徒を対象とした系統的な支援・指導プログラムの開発に取り組みたい。